

- 戸田勝一君は本年四月奈良縣吉野郡吉野製絲場に赴かる
- 竹内五之助君は本年四月岐阜市太田製絲場に赴る
- 征矢桂三君は本年三月長野縣屋代町信精館製絲場に入られたり
- 土屋保平君は本年三月木内と改姓せられたり
- 水野健吉君は本年五月三井物産横濱支店に入られたり
- 見波忍君は本年四月宮崎縣令組製絲場に轉せられたり
- 清水二郎君は本年五月漢口三井洋行に轉せられたり
- 鈴木鍊一君は本年四月鳥取縣米子町米子製絲會社に轉せられたり。
- 坂本昌造君は本年六月病死せられたり

本 部 状 況

「草若葉昨日は花の梢かな」。若葉風。時早く水涓々の流れとはなり申候。諸彦益々御健勝の御事と奉大賀候。清新活躍潑瀾の氣分は人と物を充たして餘りあり候。本會の過去と未來を連ぬるものは亦此氣分を措きて他に求む可くもあらず候。

永遠の技術に携はりて永却の時に浮ぶ我人が變はるともなく變り行く昨日今日。母校をめぐる近況を御報仕る可く候。

教職員の移動としては三月早川教授留學の途に校を去られしに止まり候。在校卒業生中齋藤格次君は三月愛知縣寶飯郡に轉せられ四月小林茂雄君は岐阜縣技手に轉せられ候。新卒業生中母校に止まられしは養蠶科卒業生曾山直高、吉野健吉、三橋宜夫の三君製絲科卒業生森山二郎、井態虎太郎、小湊潔の三君にて卒業生中母校に在之者合計十一名にて賑かに候。曾山君は川瀬教授の下に在りて石鹼製造の方面を吉野君は北島教授の下に動物の方面の助手となられ候。井熊君は製絲部に森山君は紡績部に小湊君は工藝化學部に三橋君は養蠶部に助手となられ候。「サポニフイケーション」が「ベンゼン、エクス、トラクト」が等云ふ言葉が硝子窓をもれ出るかと思へば「シルクファイバアのコーミシング」があと云ふ響が回轉しつゝあるベルトの蔭に亂れ居るのも聞え申候。「アミノ酸」が「セリシンのメルチングポイント」がと云ふ言葉が白い實驗服の上の方で動き出るかと思へば「E₁のブレンディングインヘリタンス」が「計量的性質の變異」が等云ふ響が「マイクロトーム」の横から聞ゆる事も有り候。少なくとも三年の昔。同じ學舎に自然の園に生ひ立ちし人と我時はかくして以上の如き奇しき變化を與へしものにて候。「マイクロトーム」が鍛となり「白い實驗服」が前垂算盤となり「ベルト」が製絲場の水車とあるは花が若葉に若葉が青葉に變異轉々四季變らずして變り行くに等しく何れも時の力にて候。吾々の目的は算盤にもあらず水車にもあ

らず實驗服にもあらず候。圓滑ある其運用に有之候。

本年度新入學生は養蠶科卅六名製絲科卅四名、他に選科として養蠶科四名製絲科一名に有之候。左に氏名を記し申候。

養 蠶 科

久保田昌人(長野縣)	中田太郎(長野縣)	大垣秀三(富山縣)
鈴木廉三(靜岡縣)	可兒良夫(岐阜縣)	間宮成吉(岐阜縣)
藤崎鑽(千葉縣)	鍵谷傳(岐阜縣)	首藤雄平(大分縣)
山本岩三郎(岡山縣)	土岡光郎(廣嶋縣)	吉岡猛夫(廣島縣)
黒木農夫(宮崎縣)	古谷幸樹(山梨縣)	堀場友一(愛知縣)
國枝盛(高知縣)	岸本元治(京都府)	岸田繁雄(埼玉縣)
森本爲之助(和歌山縣)	福田武光(長崎縣)	上林多兵衛(愛知縣)
坂田正賛(山口縣)	田中泰治(鳥取縣)	福富繁(佐賀縣)
天野武良(岐阜縣)	奥野慶二郎(大坂府)	小野修二(三重縣)
齋藤舍(愛知縣)	本谷良雄(茨城縣)	又木善義(宮崎縣)
須藤清麻(新潟縣)	梶田廣貞(愛媛縣)	越智岩平(愛媛縣)

廣 戶 忠 吉(岡山縣)

宇 都 宮 休 一(鹿兒島縣)

宮 島 庄 平(佐賀縣)

製 絲 科

甲 田 勝 衛(長野縣)

池 田 忠 治 郎(長野縣)

小 松 義 夫(宮城縣)

山 口 正 紀(鹿兒島縣)

吉 岡 百 藏(京都府)

楠 田 元 之 助(京都府)

戶 田 耕 三(愛知縣)

櫻 井 袈 裟 一(群馬縣)

竹 之 内 梅 次 郎(愛知縣)

渡 邊 康 輔(山形縣)

蟹 江 優(愛知縣)

梅 澤 萬 次 郎(群馬縣)

荒 木 幸 四 郎(香川縣)

五 十 嵐 健(新潟縣)

吉 開 亮 一(福岡縣)

渡 邊 亘(福島縣)

清 水 逸 五 郎(長野縣)

高 橋 安 雄(大分縣)

藤 本 與 太 郎(新潟縣)

石 塚 浪 之 助(茨城縣)

甲 本 正 道(岡山縣)

北 村 中 太 郎(滋賀縣)

猪 子 千 勝(愛知縣)

西 山 諫 治(長野縣)

小 野 良 吉(大分縣)

山 口 總 一(三重縣)

大 根 田 丑 一 郎(栃木縣)

荻 野 俊 一(京都府)

大 野 久 藏(静岡縣)

辛 嶋 正 道(大分縣)

關 川 宗 男(長野縣)

小 笠 原 喜 代 三(島根縣)

三 浦 重 雄(石川縣)

河 井 正(岐阜縣)

養 蠶 科 選 科 生

猪坂直一(長野縣)

小山田啓三(山形縣)

中村龜四郎(青森縣)

金昌漢(朝鮮)

製絲科選科生

鈴木武造(新潟縣)

本年は列年に比して入學者多數ある爲め從來の寄宿舎本舎及東寮のみにては不足の爲め新たに常入大宮神社附近に西寮を開き新入生を入舎せしめ候。年々歳々花相似歳々年々人不同」茲暫らくの間新入生を取巻ける母校の内外。新しき氣分に充ち渡る譯にて候。校舎を巡る櫻若葉。學園廣く萌え出する草若葉。心あらば未だ和服姿に故山の春を偲びつゝ三々伍々往來する若人に微笑の葉風を傾くる事にて候はん。朝な夕なの默禮が「ヤ失禮」となり「貴方」が「君」となり「私」が「僕」とあり「ですか」が「うんそうか」となる頃は蠶が桑に嚙ちりつき柳の糸が摘桑籠をのぞき込む頃にて候。初めて取つた鋤鍬に驚いて飛び出した手の裏の豆が平々亘々元の住家に逃げ歸る頃は漸やくにして實業學校的氣分の人の仲間入をなし得る時に候。先生と云ふ方は皆嚴しい恐ろしいそして早口の人であつてノートと云ふものは自分で讀んでも讀めあい様お字の集合であるものと思ひしものが授業時間が待遠しく先生の風貌に接する慈母の懐し味を感じる様にあり自分のノートを人に貸す様になる頃は太郎烏帽子の山峯が蛙鳴く小山田に黄昏の影鮮かにも映する頃に候。そして吾報告が諸兄の机下に春一日。活動の慰安のよすがにも横はる時にて

候。

茲に諸彦が健康と活動とを希望して擱筆可仕候。

會 合

我同志會は昨秋万山錦繡の時節に於て岡崎、上田、山形、前橋に同志の會合を催し母校より先生方の來臨を請ひ互に既往を談じ未來を語り我會の榮に誓の酒をくみ申候。
今其概況を左に略記仕可候。

一、同志會愛知支部發會式

大正五年十月七日愛知縣岡崎市に開催。會合するもの母校よりは針塚校長、勝木教授及松村助手來會會員としては愛知在住卒業生十九名來賓六名(三龍社)にて午後一時より三時迄三龍社講習所に於て發起人會議幹事選舉會計報告及同志會規則修正協議をなし三時半出發(三龍社)岡崎公園巽庭前に參會者一同紀念撮影をなし午後四時開會宮城氏の開會の辭次で針塚校長。勝木教授の演說三龍社長代理寺田松次郎氏の演說あり。次で會員塚本松村二氏の希望演說あり終つて懇親會。午後九時閉會す。當日來會者氏